

芸術支援とアトライティング

直江俊雄

芸術専門学群

人間総合科学研究科芸術専攻准教授

(なおえ としお／芸術教育)

芸術支援コースが生まれる

平成12年に私が筑波大学で教えるようになったとき、芸術専門学群の授業としては主に教職科目が担当であった。現在でも9科目の教職関連科目を担当しており、毎年苦しみながら（しかしやりがいをもって）、芸術の学生に適した、楽しく、ただし楽ではなく、力をつく教職の授業の開発を目指してきた。これら教職科目の取り組みを紹介することもできるのだが、今回は学群長、専攻長より「アトライティング」について書いてはどうかというご推薦をいただいた。自分としてはまだ始まったばかりで模索の部分が大きいですが、本稿ではあえてこのテーマで述べさせていただきます。

始まったばかりというのは、芸術専門学群の新しい専門領域、「芸術支援」のこともある。学群と修士課程では芸術運営に関わる新領域を発足させることが教育組織改革上の長年の悲願の一つであったようで、私が赴任した当時も活発にプランニングのための会議が続けられていた。紆余曲折が

あって、平成15年度より従来のコース外に「特別カリキュラム芸術支援学」が美術論・博物館学と芸術教育の教員によって開設され、さらにこのたび平成20年度より「芸術支援コース」へと改編される（大学院では平成19年度より博士前期課程芸術専攻に開設）。

芸術支援とは私たちの造語であり、芸術学（理論）専攻の中でも、美術史とは異なり、教育や芸術活動の運営など、人間が生きるために芸術を役立てていくアプローチを中心に学ぶ領域である。

さて、新カリキュラムの発足とともに、学群では「芸術支援学概論」と「芸術支援学IC」「芸術支援学IIC」、さらに「アトライティング論」なる授業科目を担当することになったが、授業のアイデアは教職の9科目を構築する中で出尽くしたと思っていたので、また新たな授業づくりの模索が始まった。

高校生アトラライター大賞

カリキュラム開発は、どのような学生がこのコースに参加してくるのか、という問題と切り離せない。大学入学前の教育を調べてみると、高等学校では美術を文章で表現する基礎教育がほとんどなされていないらしい、ということがわかってきた。それならば、そこに大学の側から、何らかのサポートがあればよいのではないだろうか。

私は、高校生を対象に、美術に関するエッセイのコンテストを実施するという企画を、芸術学専攻の同僚教員に提案した。「高校生アトラライター大賞」と名付けられたこのコンテストは、準備段階を経て、平成17年度に第一回、平成19年度に第二回を実施し、200を超える作品が全国から集まるようになった(写真)。

美術教育を専門とする私の立場からは、このコンテストが、単に美術理論を学ぶ学生の基礎養成という狭い目的を超えて、学校における美術教育全体の質を変えていくことに寄与できないか、という願いを持っている。端的に述べるならば、我が国の美



第2回高校生アトラライター大賞表彰式
(2008年2月9日、筑波大学学生会館)

術教育は、上手にもものを作る国民を育てる上で貢献してきたが、芸術について言葉で語る力を伸ばすことは十分ではなかった。そのことは、美術理論の基礎教育の未確立というだけではなく、明確なコンセプトを語れる芸術家、芸術の価値を自分の言葉で考えることのできる市民の育成をも遅らせ、芸術を巡る人間的環境の豊かさ、人間のための芸術という視点を置き去りにしてきたのではないかと考えているからだ。

コンテストでは、生徒が自分の作品づくりの経験を振り返って書いたり、美術作品を実際に見て書いたり、芸術の運営活動に参加した体験をもとに書くことを奨励している。応募した高校生の声からは、芸術体験を文章にする難しさに直面しながらも、いわば「生きることと芸術」というような問題にそれぞれの視点から取り組む様子が見えてくる。指導した高校教員からは、生徒に対して、作品という「もの」だけでなく、人間として、より全体的な理解ができる喜びが報告されている。

ここ数年は、この「アトラライター大賞」の企画運営を芸術支援の实地学習として、授業の一部に取り込みながら進行している。応募ルールの策定、アピールする広報企画、応募者に向けてのガイドブック作成等の支援策などを学生に投げかけ、時に企画会議のような形式でアイデアを出し合ったりし



学生のアイデアによるリーフレット(部分)

た。学生たちは既存の案の批判は容易にできるが、よりよい現実的な提案をすることの難しさにすぐ直面するようだ。最初の年は結果的に私の案を追認することが多かったが、第二回のコンテストのキャッチコピーやリーフレット案はほぼ学生の案を実現することができるようになった。

学生たちは、応募されたエッセイの選考にも直接携わる。作品を全て読み、あらかじめ示された選考基準をもとに入賞候補作品を投票する。直接的な効果は検証できないが、文章評価の経験が彼ら自身の文章能力の幅を広げる上で寄与することも期待している。

アートライティング

実は、高等学校だけではない。専攻の教員に話を聞くと、大学における専門教育で

も、美術に関する文章執筆の基礎教育は、意図的にはあまりなされてきていないという。つまり私たちは、中等教育と高等教育の両側で同時にこの問題に当たる必要があるようだ。コンテストに参加する高等学校側からも、大学における文章執筆の参考例を示してほしいという要望もあった。

そこで、「芸術支援学IC・IIC」受講の学生たちには高校生アートライター大賞の支援参加と並行して、それぞれの課題を設定しての記事の執筆に取り組ませた。その取材活動においては、対象となるアーティスト等を大学とその近辺の芸術フィールドに限定し、同じ学生や学内メンバーの立場で話を聞くことを奨励している。記事執筆初心者が陥りがちな、「権威者のご意見を賜る」症候群から早期に脱し、自らの視点で対象について考える姿勢を育てたいためである。また、疑問があれば身近な学内で何度でもアトリエに足を運び、互いに意見を交わし、また時間とともにそのアートやアーティストが成長するさまに立ち会うことができる。すなわち取材における現場との接触の密度を確保することができるのである。

授業では私の記事執筆体験なども紹介しながら、学生たちが推薦する美術記事を持ち寄って検討したり、学内の学生アトリエ探険を敢行して取材の度胸をつけたり、対

象の絞り込み・テーマ・プロット・粗書き・推敲までのプロセスを教員と学生相互の目で互いに批評し合いながら進めていく。ついには研究費から印刷費を工面して雑誌の形式で刊行するところまでこぎ着けた。20ページほどの写真入り2色刷りの冊子でも、公にするととなると校正やレイアウトに相当の時間やエネルギーを使う。Art Writingと名付けた冊子は、このたび第3号を発刊することができ(2000部)、全国の高等学校や美術関係機関に送付している。

アトラライター大賞の選考に携わる側の学生が、どれほどの文章を書けるのかが問われてしまうというリスクもあるとは思っ

たが、公開を前提とすることによる学生への教育効果の方を重視した。ジャーナリズム専門家の目から見たら素朴なものであろう。実のところ、指導の大半が「一般の人に通じる、筋の通った読みやすい文章」にすることに割られる場合も多い。それでも、何度も推敲と面談を繰り返す中で、個人的な「やつつけレポート」レベルから、未知の読者に伝達可能なレベルまで学生の文章や視点が変わっていく過程を見ることは、指導者としての喜びであり、アトライティングによる教育の効果を感じる時でもある。

補足：英語ではart writingという語順をあまり見かけないようだが、ほかに日本語で簡潔な表現がまだ思いつかないので、当面、英語のようなカタカナ語を用いている。

謝辞：「高校生アトラライター大賞」は本学教育プロジェクト支援経費の支えを受けて、人間総合科学研究科芸術専攻の有志によって運営されています。すべての関係者の皆様に感謝いたします。



Art Writing第3号表紙